ふるさとへの思いと絆をつなぐ広報誌

平成26年3月20日発行（毎月1回20日発行）

ふるさとだより

久之浜・大久、四倉、平、小名浜、勿来

2014年 Mar NO.34 3

Pick up

活発に行われるまちづくり事業

震災から３年、春を待つふるさとのいまを伝えます。

■別冊　各地で行われた3周年追悼行事

今月の子どもたち　中央台東小学校、久之浜第一小学校

写真左から／遠藤美紗ちゃん(中央台東小6年)、遠藤悠斗くん(中央台東小3年)、遠藤未稀ちゃん(中央台東小学校6年生)、遠藤愛菜ちゃん(久之浜第一小6年)

久之浜・大久

震災の記憶を風化させない
大砂嵐がやって来た!

四　倉

安全・安心の農産物を提供
海岸のハマナスを移植

平

ふるさとの星　寶藏寺住職
待望の公開へ塩屋埼灯台

小名浜

中之作プロジェクト活動中
復興公営住宅モデルルーム

勿　来

「やまたまや」再オープン
賑わう公民館まつり

震災の記憶を風化させない

震災語り部と支援ボランティアの活動

3年前の3月11日、そこにあった日常が一瞬のうちに消え去りました。そして今改めて気付かされることは―自然の脅威、生きていることへの感謝、家族との繋がり、立ち上がる勇気、そして久之浜への思い。震災の記憶を風化させず、震災の教訓を多くの人へ、そして次の世代へ伝えるために活動する人がいます。

あの日、今日そして未来へ 震災語り部の思い

震災以来、全国から企業団体、サークルなど様々なグループの視察や被災地スタディーツアーで、今なお多くの人が久之浜を訪れています。そして、その中に、震災の記憶を伝える語り部の姿が。「いわき復興支援・観光案内所」の研修を受け登録された久之浜の語り部は、佐藤トミ子さん、石川弘子さん、鈴木玉枝さん、阿部忠直さん、若松美星さん、高木京子さんの6名。「語り部の依頼があった時、最初は断りました。でも、大変な思い、悲しい思いをしたのは私だけではない。立ち上がらなきゃって語り部を始めました」と高木さん。語り部各々が、地震当日や避難生活の様子、久之浜の被災状況と現状、そして防災の意識がいかに大切であるかなど、自らの体験をもとに語ります。「全国各地からの支援には感謝の気持ちでいっぱいです。今、そしてこれからの久之浜について発信することが恩返しだと思っています」と佐藤さん。「3年5年そして、10年後に必ず戻って来て、変わって行く久之浜の姿を見て下さい」語り部の皆さんは視察やツアーの参加者に語りかけ、その視線は遠く未来を見えています。

震災当日、今、そして未来の久之浜について訪問者に伝えます。写真は鈴木玉枝さん

幅広い年代の訪問者が語り部の言葉に耳を傾けます。写真中央・阿部忠直さん

6名の語り部が交代で、久之浜を訪れるグループに対応します。右の写真は佐藤トミ子さん

震災以来久之浜に集う　企業人ボラバス有志の会

ボランティアバスツアーで久之浜を訪れて知り合い、瓦礫撤去作業を一緒に行った有志で結成された「企業人ボラバス有志の会」。代表の要川憲彦さんらは震災追悼の花供養にもボランティアとして毎年参加するなど久之浜支援を続けてきました。

「震災の風化は進んでいます。皆が情報発信をやめてしまったら、その風化はもっと進んでしまうでしょう。情報を生かした支援活動を続け、微力ながら復興の助けとなりたい」と要川さんは話します。有志の会のモットーは『繋ぐ・伝える・続ける』。自分たちが実際に見た被災地久之浜の状況を身近な人に伝え続けて3年が経った今、有志の会の皆さんの思いも久之浜と繋がっています。

「企業人ボラバス有志の会」の皆さん。32名が久之浜を訪れ、お餅をふるまいました

もち米30kgを持ち込んでのもちつき大会も3回目。浜風商店街の冬の催しとして定着してきています

3月11日生まれだからできること 311生の会

「どんな出来事も時と共に風化し忘れられていく。でも、自分の誕生日に起きたことは忘れようにも忘れられない。だったら、3月11日に生まれた者として、皆がこの日を忘れないような活動をしよう」と1975年3月11日生まれの井上能宏さん。震災後、久之浜諏訪神社に泊り込み、久之浜・大久復興支援チーム結の一員として活動していました。そして、昨年4月には同じ誕生日を持つ仲間と「311生の会」を立ち上げ、8月に久之浜などの被災地視察を行いました。12月には左記有志の会の活動に合流。「首都圏に住む会のメンバーと被災地の人。一緒に被災地の未来を考えた活動を続けたい」と息の長い復興支援の道を探っています。

代表井上さん（写真中央）。FKP（フクシマ キズナ プロジェクト）と合同で久之浜を訪れました

復興へ向けた動き

久之浜 大久

グランドデザイン策定部会

久之浜・大久地区復興対策協議会（吉原二六会長）に設置された復興グランドデザイン策定部会（遠藤諭部会長）。

3月12日に開かれた11回会議で、まちづくり方策についての修正協議も終了。現在、取りまとめ作業に入っています。

商業施設出店希望者会議

工事の進む久之浜土地区画整理区域内に建設予定の商業施設。久之浜町商工会では、施設に出店を希望する事業主らとの会議を月に2回のペースで開いています。

計画されている2階建ての施設には、生鮮食品やお惣菜、海産物等の販売スペース、飲食店舗などが設けられる予定です。

①信頼される食の提供、②安心・安全な楽しみの場づくり、③仕事（場）をつくるをコンセプトに、久之浜の復興へ向けた協議が進行中です。

防災緑地づくり会議

昨年4回にわたり開催されたワークショップで地区住民からの様々な意見が出された久之浜地区防災緑地。工事の本格着工を前に10年先50年先の未来を見据え、緑地の育成と活用の仕組みづくりに向けた取組みが2月23日から始まりました。

会議では「久之浜らしい森づくり」を到達目標に、①防災緑地の活用方法や景観を考えた植生のあり方、②植栽される樹木等の育成手法と維持管理の担い手、③育成、活用、維持管理に向けた収益確保のアイディアなど様々な角度から防災緑地を考えていきます。

復興対策協議会講演会開催

2月18日、久之浜・大久地区復興対策協議会主催の講演会「復興への7つのテーマ」が大久公民館で開かれました。講師は住民主体の地域づくりの手法「地元学」を提唱し、東北各地で地域おこし活動を行う民族研究家結城登美雄さん。「復興への鍵は、住む人の思いと行動」と言う結城さんの言葉に聴講者は聞き入っていました。

雪の中、桜の植樹

久之浜・大久を桜のまちに

2月8日と9日、雪が降りしきる中、大久と久之浜町内で桜の苗木を植えるグループの姿がありました。地区住民や吉原二六さんをはじめとする区長さん、高木美郎久之浜諏訪神社宮司、そして静岡県三島市の「チーム桜龍in久之浜」のメンバーが河津桜の植樹を行いました。代表の佐野比呂子さんは、震災後、三島市、富士市の皆さんにより結成された「久之浜応援団」の一員として、諏訪神社の合同神幸祭にも参加するなど久之浜支援を行ってきました。私立三島高生徒会が、文化祭で募った募金で久之浜支援を計画。「現金の寄付より、形として残るものをと桜を選びました」と佐野さん。桜一本千円基金も立ち上げ12月にも桜の植樹を計画しています。「植樹を10年続けて、久之浜が桜のまちになっていく様子を見届けるの」。佐野さんの笑顔が弾けた雪の日でした。

三島からの桜の苗木は130本。大久町の稲荷神社、海竜の里近くのちびっ子広場、久之浜一小などに植えられました

大砂嵐がやって来た！

歓声と笑顔あふれた交流会

大砂嵐関にくらいつく久之浜一小の児童たち。10人が束になっても関取はびくともしません

2月13日、エジプト出身の力士、大砂嵐関（大嶽部屋）が久之浜一小を訪れました。校庭にある土俵にあがり、1～3年生の児童と押し相撲。「なぜエジプトから来てお相撲さんになったのですか」「勝つためには何が必要ですか」などの児童からの質問にていねいに受け答えをしていました。寒空の下、校庭の一角が楽しげな歓声と温かい笑顔に包まれました。

〈浜風商店街〉も訪れた大砂嵐関。特製ちゃんこで冷えた身体を温め、情報館では震災当時の写真や記録映像を食い入るように見ていました。「暗闇にも光は必ず差して来る。皆さんなら、全てを乗り越えられる」と熱いエールを送ってくれました。

大砂嵐関を囲み児童たちは「横綱になってね」「また来てね」。大勢の大砂嵐ファンの誕生です

児童との交流の後、浜風商店街の情報館で語り部石川弘子さんから震災当時の様子を聞く大砂嵐関

久之浜地区放射線量測定記録

（各区代表ポイント）

●測定日：平成26年2月26日（天候：晴れ）
●測定者：久之浜・大久地区復興対策協議会
●測定器：日立アロカメディカル製 TCS-172
（シンチレーションサーベイメーター）

測定ポイント	地上1cm	地上100cm
田之網（田之網集会所）	0.11	0.12
南町（旧道沿い中央部）	0.08	0.10
中町（旧道高木屋旅館付近）	0.09	0.08
北町（久之浜駅前）	0.13	0.13
東町（旧久之浜漁協前）	0.09	0.09
西町1区（西町公園付近）	0.14	0.15
西町2区（久之浜一小正門付近）	0.25	0.23
金ケ沢（鹿野付近）	0.24	0.25
末続（末続駅前）	0.20	0.21
大久（大久公民館付近）	0.15	0.16
筒木原（久之浜二小西門付近）	0.12	0.12
小久（町田橋付近）	0.15	0.13
小山田（小山田集会所付近）	0.18	0.18

単位はすべてμsv/h

※㈱東北イノベーターのHP
http://www.thkinnovator.co.jp/ で
より詳しい放射線情報をご覧いただけます。

品質に定評があるトマトを手にする大和田正幸さん。「栽培している自分たちがおいしいと思える農産物を作ることが大切」と話しています

これからも安全安心の農産物を提供し続ける

農事組合法人
大野水耕生産組合
代表理事　大和田　正　幸さん

震災で観光いちご園の来場者が激減

大野水耕生産組合は、平成2年にトマトの温室栽培をスタートしました。15年からはトマト栽培の技術を生かして、観光いちご園もオープン。「いちご狩りに来たお客さんに、直売所でトマトを買ってもらえれば、というのがきっかけでした」と代表理事の大和田正幸さん。

17年にはいちご園を増設し、市内外からの来場者は年間1万人を越えるようになりました。

会社の知名度も少しずつ上がって来た矢先に起きた大震災。温室のガラスが割れたり、通路のコンクリートに亀裂が入る程度の被害でしたが、原発事故の影響で福島県産の農産物が敬遠され、シーズンを迎えていたいちご園を訪れる観光客は激減しました。

従業員や周囲の助けで困難を乗り越える

「3月はいちご狩りの最盛期で、会社としてもかき入れ時だったんですが…。せっかく実ったいちごやトマトを処分するのは辛かった。食べ物がなくて困っている福祉施設や避難所があると聞いて、『園まで取りに来れるなら』とお譲りしたこともありました」と大和田さんは当時を振り返ります。

従業員が避難して人手不足になった際には、近所の住民や友人たちが駆けつけて、ハウスの修理や苗の管理を手伝ってくれました。

「震災直後の売り上げがゼロに等しい状況でも、周囲の助けで会社を続けることが出来て、とてもありがたかったです」と感謝の気持ちを胸に仕事に取り組んでいます。

震災から3年が過ぎ、行政による農産品のPR活動などもあって、同組合のトマトの値段と出荷量も回復傾向にあり、いちご園を訪れる観光客の数も戻りつつあります。

「これからも安全・安心で、お客さんにおいしいと喜ばれる農産物を作っていきたい」

赤く色づき、たわわに実ったトマトといちごの一つひとつに、大和田さんの気持ちが込められています。

四倉町玉山にある同社。温室はトマト栽培が11,000㎡、いちごは4,500㎡です

観光客や家族連れはもちろん、幼稚園などの園外活動にも利用されているいちご園

スタッフのみなさん。いちご園は、車椅子のお客さんでも利用出来るように、棚が低く作られています

四倉の将来に向けて市まちづくり懇談会を開催

「平成25年度四倉地区まちづくり懇談会」が2月6日、四倉公民館で開かれ、地域住民の皆さんら約150名が参加し、市長や市関係部長と意見交換をしました。

「賑わいとふれあい、笑顔とやさしさが交差する安全・安心のまち四倉をめざして」をテーマに、住民の代表6名が意見を発表しました。

当地区では震災後初の開催となった今回は、震災や原発事故を踏まえた意見が目立ちました。

提案内容は以下の通りです。

「四倉公民館の移転・改築について」「放射能対策について」「食品の安全と風評被害解消をめざして」「四倉中核工業団地とセメント工場跡地について」「市街地の内水排除対策について」「安心して暮らせる四倉町を創るために」

公民館について意見を述べた、市青少年育成市民会議四倉地区推進協議会の鈴木英雄会長

四倉 復興へ向けた動き

下仁井田から農地再生へ

県が国の復興交付金を活用し、津波で被災した農地の再生を図る「復興基盤総合整備事業」が1月30日、市内で初めて下仁井田地区で着工しました。

同地区は震災時の津波の影響で冠水したものの、塩害を受けた土を取り除き、作付けを再開しています。

この事業は平成27年度までの計画予定になっていて、約40ヘクタールの農地を対象とし、ほ場の区画を拡大化して生産性を上げ、農業振興を図ります。

市内では下仁井田地区のほかに、錦・関田地区と夏井地区でも工事が行われます。

市内のトップを切って始まった下仁井田地区整備事業

第4回四倉漁港復旧・復興検討会を開催

2月25日、四倉支所2階会議室で開かれました。

県の担当者から示された主な計画案は以下の通りです。

・漁港内の堤防を乗り越える歩行者用の階段を2ヵ所に設置し、幅は1・5mとする。

・堤防整備や周辺の土地のかさ上げによって漁港内の排水を悪化させないために、排出口を現在の1ヵ所から3ヵ所程度に増やす。

・道の駅よつくら港前の多目的広場のステージに屋根を設置する案については、現事業での整備は困難。

・防災緑地隣接部の駐車場には、国道6号側の歩道に沿って緑地帯を設ける。

・防災緑地と海岸堤防を乗り越える方法としては、陸側は境川と平行な斜路、海側は堤防と平行な斜路で計画中。

四倉漁港復旧・復興検討会は今回で終了しました。

今後は、工事着手前に沿岸部の住民の皆さんを対象に、事業計画の説明会を開催します。

四倉点描　2月のアルバム

8日 歳の神に参加

四倉ふれあい市民会議は子ども達約60名を引率して、大沼郡三島町の伝統行事「歳の神」に参加。

12日 オープンを控えて

4月に開所予定の（仮称）チャイルドハウス。工事用のシートが外され、船を模した建物が姿を現しました。

18日 遠足で水族館へ

四倉第一幼稚園の園児らは茨城県のアクアワールド大洗を訪れ、大きな水槽の中を泳ぐ魚たちに大喜び。

熊谷さんを招いて講演会

四倉ふれあい市民会議主催の「まちづくり講演」が2月22日、四倉商工会館で開かれました。

講演に先立って日大理工学部の岡田智秀准教授から、まちづくり報告がありました。昨年、四倉小６年生を対象に行われた「よつくらキッズ復興まちづくり」の経過を紹介。児童たちがワークショップなどを通してまちあるきマップを作成し、故郷の魅力を再発見した成果を発表しました。

「まちづくり講演」で講師を務めた熊谷順子さんは、元郡山国道事務所長で㈱復建技術コンサルタント理事。国土交通省東北地方整備局防災課長の時に震災に遭いました。

熊谷さんは「東日本大震災から３年　大震災の初動対応そして復興へ」のテーマで、震災直後の対応や子ども達への防災教育の大切さ、高速道路の盛土構造が津波を防いだ例などを、自身の体験を踏まえて講演しました。

講演の中で、「今までの経験を生かして知恵を働かせることが大事」と話す熊谷順子さん

海岸のハマナスを四倉小の校庭に移植

２月26日、四倉海岸に自生しているバラ科の植物ハマナスを、四倉小学校の校庭に移植する作業が行われました。

自生地域で海岸堤防や防災緑地の工事が始まるための措置で、同小5年生約50名が参加。県いわき建設事務所の担当者が工事の目的やハマナスの生態について説明した後、児童たちがひとり一株ずつ、校庭の花壇に植えました。

このハマナスは、今の５年生たちの卒業後も下級生が世話を続け、海岸の工事が終わった後で、砂浜に戻す予定になっています。

四倉海岸のハマナスを花壇に移植する児童たち。今年の夏には花を咲かせるそうです

ふるさとの星

震災からの復興を願い 父の後を継ぎ住職に

豊間寶藏寺住職 菅 光徳 さん（26歳）

●プロフィール　昭和62年12月　いわき市生まれ
平成18年３月　磐城第二高校卒
平成21年３月　いわき明星大学卒
平成25年11月　第三十一世寶藏寺住職就任

豊間寶藏寺前にある〈妙石山自光院寶藏寺〉。昨年11月、先代の住職が突然亡くなられ、息子である光徳さんが第三十一世として就任しました。

光徳さんは大学卒業後、教師を目指しながら寺の手伝いをしていました。また学生時代、ハンマー投げの選手だった経験を生かし、市内で陸上競技の指導をするなど、地域に根づいた活動を行うなかで震災に遭いました。

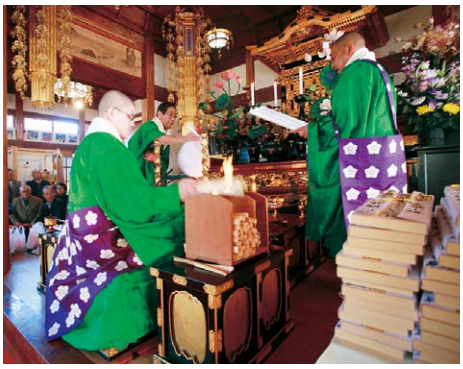
津波は寺の近くまで押し寄せ、豊間のまちを飲み込みました。家を失った檀家や近隣の人々40名ほどが本堂に集まり約１週間、身を寄せ合って避難生活を送りました。

震災で被害を受けた地元のことや、犠牲になった同級生のことなどもあり、本格的に住職になろうと決意。その月の26日から京都で修行を開始し、平成25年４月には愛知県の〈別格本山大須観音寶生院〉に修行に入りました。

携帯電話も無い修行の場では、時折届く手紙だけがふるさとの様子を知る手段。ずっと気になっていた折、先代と交流があった愛知県愛西市の知人が平成23年10月に救援物資を豊間区に送ってくれました。

そして１年６ヵ月が流れたある日の明け方「父が危篤」という電話を受け、約５時間かけて駆けつけました。

「父の容態が悪化した時から豊間に帰る決意をしていました。不安もありましたが、自分ができることで、ふるさとに貢献していきたい」一人でも多くの若い世代が豊間に帰ってこれますようにと、今日も心をこめて祈りを捧げています。



檀家に初顔見せとなった1月23日の大般若御護摩で見事に大役を務め上げました

昔の知恵を学ぶ

元気な児童たちより、手先の器用さではおばあさんの方が上手でした

最後に児童代表から感謝の言葉。なごりおしい時間でした

２月12日、豊間小学校で「むかしあそびをしよう」と題した、地域のお年寄りとの交流授業が行われ、沼ノ内地区の老人会の11名が参加しました。１、２年生の児童と、竹とんぼ、あやとり、こま回し、お手玉、けん玉、などの懐かしい遊びを一緒に楽しみました。

この特別授業は豊間小学校と豊間公民館による合同主催。水谷大校長から「学校は知識を教えています。今日はみんなよりたくさん経験のある方々です。学校では教えきれない知恵を学んでください」と挨拶がありました。児童たちは、普段見慣れない遊びにはじめは戸惑っていましたが、お年寄りの指導でコツを教えてもらい、次第に引き込まれていきました。

参加したお年寄りからも「少し教えただけで、みんな上手にできました。こちらも、童心に返って楽しめました」と話していました。

竹とんぼの飛ばし方を教えてもらう児童たち。目が真剣です

おはじきで遊ぶ児童たち。遊び方が分かると笑顔がこぼれます

映画監督が福島支援 豊間地域で映画を制作

2月21日から23日の3日間に渡り、本誌1月号で紹介した秀嶋賢人監督の映画「みんな生きている」の撮影が沼ノ内、薄磯、豊間を中心に行われました。

昨年12月には「福島応援学習バスツアー」で豊間地区を訪れ、風評対策で支援した秀嶋監督が、今回は本業の映画で心の支援をするために再び訪れました。

震災から3年目を迎え、この時期に起きる心の病を監督は危惧し、自ら脚本を書き、制作を開始しました。

ロケハンや取材でたびたび本市を訪れ、出会った人々と気さくに触れ合っていた秀嶋監督。今回の映画では地域の方々にエキストラの依頼もしたそうです。

今回の映画「みんな生きている」は札幌国際短編映画祭出展作品で、完成試写会の初回は豊間地区で行う予定です。

秀嶋監督にエキストラを依頼されて参加した地元の方々

豊間中学校に応援歌を贈る

2月24日、豊間中学校で豊間中学校への応援歌「泣かないで」の直筆の歌詞が贈呈されました。

これは歌手の紅晴美さんが作詞、作曲を行ったもので、当日は後援会長の星野としよさんから桐生由久子校長に手渡されました。

体育館での全校集会の前に行われた贈呈式。紅晴美さんが歌う映像が流れた後、紅さんとの親交のある〈民宿・鈴亀〉の主人で薄磯区の副区長、鈴木幸長さんから、応援歌が贈られた経緯が語られました。

また、鈴木さんが修復した津波で痛んだ木造校舎の写真3枚も同時に贈られました。

「いつも見守ってくれていることを感じました。今日の励ましをこれからも生かして行きます」と桐生校長。写真は校長室に飾られる予定です。

星野後援会長から歌詞を受け掲げる桐生校長

新しい町のコミュニティーづくり

ふるさと豊間復興協議会は、2月22、23日に第1回目の「豊間災害公営住宅 団地町会づくりワークショップ」を開催しました。

この取り組みは、復興庁の「新しい東北」先導モデル事業の一環で、東京専門家支援グループ（高見澤邦朗東京都立大学名誉教授）のサポートで行われました。

大妻女子大学の松本暢子教授の講演の後に、グループに分かれて、町会づくりやルールづくりについてワークショップ形式で話し合われました。

同協議会事務局の渡辺博之さんは「今回、第1回目の開催で約半数の参加者でありましたが、集合住宅に住み慣れない住民の不安を緩和したい」と2回目の開催に向け意欲を見せていました。

「海まち・とよま市民会議」進捗情報

2月13、27日の会議は先月の会議で議題が一周りしたことを受け、住民にも分かりやすく、より具体的に取り組む内容を絞り込む話し合いが行われました。

これまで議題に上った、安全・安心、子育て、産業・雇用、生活・コミュニティ、魅力、忘れない、の6つテーマで出された取り組み内容を投票形式で選考しました。

次回の会議では、海まち・とよまのロゴデザインについて話し合われる予定です。

待望の一般公開へ 塩屋埼灯台

東日本大震災で被災した、〈塩屋埼灯台〉の復旧完成記念式典が2月22日に行われ、灯台の一般公開も約3年ぶりに再開されました。

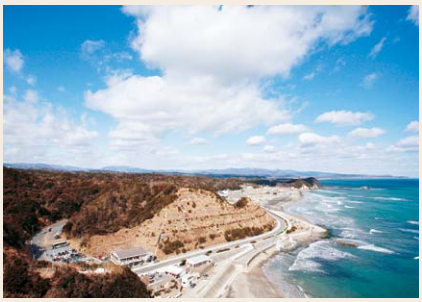
清水敏男市長は「いわき市の観光のシンボルである灯台の復旧は風評の払拭にもなり、素晴しいことです」と祝辞を述べました。

その後、来賓者代表によるテープカットが行われ、灯台の一般公開が再開。公開を待ち望んでいた見学者が灯台への坂道を登りました。

灯台下でお土産店を営む、〈馬目商店〉の馬目由貴子さんも、「灯台の上に人の姿が見えると再開した実感があるね」と嬉しそうに話していました。

灯台から豊間方面を望む。この日を祝福するような天気でした

エントランスには豊間小学校3年生の絵画が飾られていました


薄磯方面。空と海の最高のコントラストが広がっていました

夜もライトアップされて美しい灯台が海を照らします

中之作・江名の地域活性化に取り組む

NPO 法人　中之作プロジェクト
理事長　**豊田 善幸** さん

震災による津波の被害が残る中之作・江名地域の風光明媚な港町を次世代へ残そうと活動している方がいます。NPO法人「中之作プロジェクト」理事長の豊田善幸さん(44歳)です。

港町の変わり果てた風景に触れる

震災前、豊田さんは中之作・江名の港町の風景に心を魅かれ、たびたび趣味の自転車で訪れていました。震災後、津波の被害を心配し、自転車を走らせました。目に飛び込んできたのは、民家に「取り壊し」と書かれている紙が貼られ、変わり果てた街の光景でした。

震災後、中之作プロジェクト発足

「震災前の美しい港町の風景を残したい」そう考えた豊田さんは、中之作プロジェクトを立ち上げ、有志と共に中之作・江名の景観と地域文化の保存と街の活性化に取り組みはじめました。

豊田さんが自宅から撮影したお気に入りの1枚

「直してみんかプロジェクト」に取り組む

1級建築士の豊田さんは、地域資源の保存として、中之作港近くで津波被害を受けた築200年の古民家を再生させようと、2011年7月「直してみんかプロジェクト」をスタートさせました。今年1月には、この古民家の修復が終了し、「清航館」と名付け、オープニングイベントとして「つるし雛飾り祭り」が開催されました。「学び」「楽しみ」「味わい」地域資源の活用について知ってもらえる場所として利用されており、今後は他の古民家の再生にも取り組む予定です。

津波で被災した古民家を再生した清航館

つるし雛飾り祭りの様子

中之作へ家族と共に転居

今年1月、清航館のオープンに合わせ、設計事務所兼住居を隣接の再生した古民家に構え、奥様と昨年末に誕生したお子さんと共に転居しました。一家は地域に根付き愛されています。また若い世帯が少ない地域とあり、お子さんはご近所の人気者です。「中之作港から太陽が昇る風景はとても綺麗で、お金では買えません。多くの方に朝焼けの中之作港を見てもらいたい」と豊田さん。古民家再生により住居を確保した上で、この地域への移住者を増やしたいと思案する日々。豊田さんは「たくさんの人に、この素晴らしい風景を毎日見て欲しい」と話します。

後世に残したい中之作港の朝焼けの風景

地域の伝統・文化保存への取り組み

昨年末、清航館にて「使ってみんかプロジェクト」として、しめ縄づくり教室を開催し、地域の方をはじめ多くの参加者が市内から集まりました。市内から寄せられた藁を使い、地産地消によるオリジナルしめ縄を制作し、伝統文化に触れました。震災を経験したことで街や地域を見直す機会となり、若者の視点により新たな魅力が発掘されています。中之作港に昇る太陽のように、若者の創造性や行動力は、街や地域に明るい未来を照らしていきます。

NPO法人
中之作プロジェクト
いわき市中之作字川岸10
☎0246-55-8177
http://toyorder.p1.bindsite.jp/nakanosaku/

復興へ向けた動き

小名浜

県が整備する復興公営住宅の「モデルルーム完成」

2月1日、小名浜字辰巳町地内に県の復興公営住宅モデルルームがオープンしました。

このモデルルームには、2LDKと3LDKの2戸分が整備されています。

平成27年11月から入居開始予定で整備が進められている、市の小名浜地区災害公営住宅と一部間取りは違いますが、参考に見学することができます。

高齢者の方も快適かつ安全に生活できるよう、バリアフリー仕様になっています。

●展示期間
平成26年2月～
平成28年1月
●開館時間
午前10時～午後5時
●住所
小名浜字辰巳町23
●休館日
毎週水曜日、年末年始

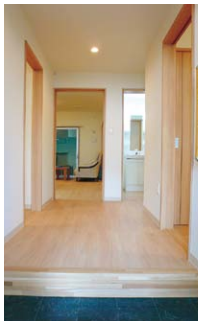
モデルルーム展示場の外観

モデルルームのレイアウト図

室内はバリアフリー構造

使いやすそうなキッチン

開放感のあるリビング

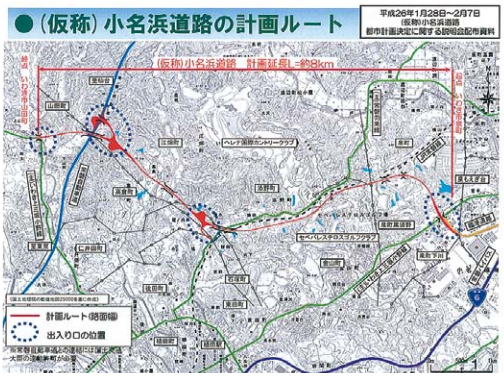

広々とした3LDKの玄関

(仮称)小名浜道路の都市計画案(路面幅)が示される

1月28日、もえぎ台集会所で、「(仮称)小名浜道路の都市計画決定に関する説明会」が開かれ、約40名の住民が参加しました。

県いわき建設事務所より、昨年10月の説明会で示された概略ルート帯(幅員約200m)に続き、今回は道路の路面幅(代表幅員13・5m)が示され、都市計画決定の手続きや今後の事業スケジュールが説明されました。

今回の説明会は、もえぎ台集会所のほか、小名浜地区(3カ所)、勿来地区(6カ所)の計9カ所で行われました。



(仮称)小名浜道路の都市計画案

住民説明会の様子

クウェートからの贈り物

2月22日、アクアマリンふくしま本館北側に「クウェート・ふくしま友好記念日本庭園」がオープンし、竣工式典とオアシスシンポジウムが開催されました。

平成24年7月、クウェート国から同館に贈られた300万ドルの復興支援金で「(仮称)アクアマリン縄文の里」整備の第一弾事業として、日本庭園が作られました。この事業は、人と自然の共生バランスが最も取れていたと考えられる縄文時代の環境再現を目的としています。

庭園は同日より一般公開され、同国の砂漠オアシスを表現した展示コーナーには、乾燥地帯に生息するキツネの仲間「フェネック」が展示されています。

↑14名が講演した竣工記念「オアシスシンポジウム」

↑竣工式典には駐日クウェート国特命全権大使や佐藤県知事・安部館長・清水市長などが列席

→「くずの海」を「鯉の川」が囲む日本庭園は角度・時間・季節などにより様々な光景を見せます

市民講座で街の史跡を巡る

10月から小名浜公民館でスタートした街の歴史を勉強する市民講座「小名浜物語」が、2月18日最終回を迎え、小名浜まちづくり市民会議・歴史と文化づくり委員会による街の歴史を知る現地見学を行いました。

この日は、市暮らしの伝承郷館長・小野浩さんを講師に迎え、いわき・ら・ら・ミュウをスタートに、3時間をかけて受講者等20名が街の史跡を巡りました。古湊地区では、小名浜代官所跡地にある小名浜御陣屋跡石碑や富ケ浦公園にある国際港の礎石などの史跡を巡り街の歴史に触れ、また震災の津波による浸水地域も再確認しました。

↑小名浜御陣屋跡石碑を見学する受講者

←小野さんが活気あった時代の写真を用いて街の様子を解説

帰ってきた町のシンボル

～八幡台やまたまや～

3年前の記憶を振り返る

昭和48年3月に創業以来、宴会やパーティー、結婚式や成人式の会場としても利用されるなど、地域に愛され続けてきた〈八幡台やまたまや〉。しかし、3年前の震災では甚大な被害を受けました。

発災時、幸いお客さんはいませんでしたが、約20名の社員が業務を行っていたそうです。その中の一人が常務取締役の坂本達雄さん。大きな揺れに襲われると立っていることもままならず、その場にいた社員たちとともに机の下に隠れるなどして、とっさに安全を確保しました。ようやく揺れが収まり辺りの様子を確認しに行くと、天井は崩壊し、割れたガラスが飛び散り、外壁にひびが入るなど、目を覆いたくなるような光景が広がっていました。

取材に対応してくれた、坂本達雄さん（写真左）と、企画部の住谷敬さん（写真右）

しばらくして、津波が押し寄せてくる危険があることを知った坂本さん。高台にあるやまたまやには、たくさんの住民が避難してきたそうです。しかし、損傷の激しい建物の中に人を入れるのは不可能と判断。数台のマイクロバスに約120名の住民を乗せ、食料を持ち寄りながら、バスの中で避難生活を送りました。ようやく支援物資が届いたのは、住民をバスに避難させてから3日後のこと。バス生活は5日間続きました。

八幡台に甦ったシンボル

震災の翌日からは、社員たちが協力して復旧作業を行っていました。しかし、4月の余震によって壊滅的な被害を受け、全壊に。付近が通学路となっていることもあり、その年の夏に取り壊しを余儀なくされました。

その後はグループの施設である、川部町の〈ブライダルタウン・コリーナ〉に事務所を置き、昨年7月から元の場所での再オープンに向けて建設作業を開始。2月14日、引渡しが行われ、20日に待望のグランドオープンを迎えました。

「植田の町に、再びあかりを灯すことができました」と、笑顔で話す坂本さん。これからも地域のシンボルとして、人々に愛され続けるでしょう。

株式会社八幡台やまたまや
植田町八幡台6
☎0246-63-1288
（休館日毎週水曜）

シックな色で統一された落ち着きのあるエントランス。今後は、敷地内にソーラーパネルの設置も予定しています

大きな窓の向こうには植田の町並みが。災害時に備えて食料や飲料水なども備蓄されています

震災直後のやまたまやの様子（写真提供：八幡台やまたまや）

Part.2 みんなで行う「まちづくり」

2月24日、勿来支所2階会議室で「いわき市南部地区まちづくり事業」第4回実行委員会が開催されました。

今回の参加者はおよそ25名。それぞれ3班に分かれ、今夏に開催される市民討議会の名称について話し合いが行われました。「どんな名称なら大勢の人が討議会に参加してくれるか、興味を持ってくれるか」をふまえて数々の案が出された結果、名称は「なこそ未来ばなし」に決定しました。

その後、討議会で話し合う大きな内容となってくる、大テーマの決定に向けても議論。その結果3つの候補が上がりました。

次回は大テーマの選出、小テーマの決定を目標に、3月26日19時から、勿来支所3階大会議室で開催予定です。

前回出された意見を相関図としてまとめたものを参考に、談笑しながら議論するみなさん

復興へ向けた動き

勿来

錦町須賀地区 集団移転跡地について検討

2月21日、錦町の須賀集会所で「まちづくり懇談会～防災集団移転跡地の活用を考えよう！～」が開催されました。現在、防災集団移転促進事業が進められている錦町須賀地区。その移転跡地をどのように活用していくかについて、住民を交え話し合われました。

会には、地域住民をはじめ、県・市の職員、地元NPO団体など、約35名が参加。それぞれが3つの班に分かれ、ワークショップ形式での意見交換を行いました。

提案された主な土地活用のアイデアは、以下のとおり。

- メガソーラー
- 風力発電
- 公園（アスレチックor憩いの場）
- サイクリングコース
- 遊歩道
- パークゴルフ場
- キャンプ場
- レストラン
- 震災のメモリアル施設
- 市民農園
- 津波避難施設
- サーファーや釣り人のための駐車場

など

住民からは、「人が集まり地域が賑やかになるようなものが欲しい」との意見が多く出されました。そのほか、車のすれ違いができるよう、豊川橋の整備を求める声も。

今後は、今回出された意見をふまえて検討を加え、再度懇談会が開催される予定です。

詳しくは、市勿来区画整理事務所まで。

☎0246-63-2111

大きな図面を使い、付箋に書いたアイデアを発表する参加者。同地区の災害危険区域は約8.3ha、移転促進区域は約4.0haとなっています

災害公営住宅「錦団地」入居説明会

2月14日、災害公営住宅「錦団地」への入居内定者を対象にした、説明会が行われました。

会では、市住宅課の職員から本申込みの手続きについて書類の説明がされたのち、参加者からの質疑に応答。また、住宅の設備や駐車場の使用方法などについても、詳しく説明が行われました。

今後は3月下旬に内覧会の開催を予定。その後に鍵の引渡しが行われ、4月1日から入居が開始される予定です。

詳しくは、市住宅課まで。

☎0246-22-7496

会場となった勿来支所3階大会議室には、およそ50名の入居内定者が集まりました

2月22、23日 「第38回 植田公民館まつり」開催

2階では、地元サークルの活動作品を展示。一部販売も行われました

地元で人気の「磐農ストア」も出店され、女性客に大盛況!

東田保育園の年長児、27名による和太鼓演奏で公民館まつりがスタート!

22日には、子ども体験コーナーも開催。絵手紙作成やビーズアクセサリー作りなど、たくさんの子どもたちが参加しました

「ケイキフラ・ワヒネフラ」のみなさんによる華麗なフラダンスの披露に、客席からはアンコールの声も

23日には芸能発表会を開催。会場には大勢の観客が押し寄せました

吹き矢の体験コーナー。的をよーく目がけて、思いっきり「ふっ!」

いわき市 ふるさとだより 第34号
平成26年3月20日発行
●発行:いわき市 ●編集:有限会社いまぁじゅ ふるさとだより編集室
●編集室:〒973-8411 福島県いわき市小島町3丁目3-3 プリンセス・アイ1F
Tel&Fax:0246-26-5157
Mail:furusato@asally.co.jp
http://www.furusatodayori.com

「関船団地」入居開始

2月7日、常磐公民館で災害公営住宅「関船団地」への入居内定者を対象にした説明会が行われました。

約40名の参加者に、住宅課の職員から必要書類などの説明があったのち、参加者から室内の設備や駐車場などについての質問が、あがりました。

3月1日の入居開始日には、同団地で鍵の引渡式が行われ、入居者はこれからの生活に期待を寄せていました。

市住宅課長による挨拶から入居説明会が始まりました

32世帯の入居者を代表して、清水敏男市長から鍵を受け取る小林文夫さん(右)

「ふるさとだより展」開催

2月6日～26日まで〈いわき・ら・ら・ミュウ〉2F展示室にて、「ふるさとだより展」が開催されました。

平成25年度の掲載記事をピックアップして拡大したものや、誌面に掲載しきれなかった写真を掲示。大勢の来場者が訪れ、中にはバックナンバーを持ち帰る方の姿もありました。

また現在は、ラトブ5Fの総合図書館にて3月23日まで開催中です。

月ごとに記事を並べ、バックナンバーも見やすく設置

熊本県から復興支援のため、いわきに訪れ、立ち寄ったという方も

お知らせ　交流スペース「ぶらっと」移転

〈イトーヨーカドー〉2Fにある交流スペース「ぶらっと」が、4月上旬に平一町目のスカイストア内に移転します。3月31日までは、これまで通り現在の場所でサロン活動を行い、4月から引っ越し作業を進める予定。

スタッフの佐藤緑さんは「新しい移転先も、みんな集まってほっと出来る場所にしたい」と、笑顔を見せました。移転後も引き続き手芸やデッサン、囲碁、将棋などを楽しめるほか、お茶を飲みながら談話するスペースもできる予定です。

ワシントンホテル向かいのスカイストア

交流スペース「ぶらっと」
平字一町目25　スカイストア内
☎0246-38-6785

ふるさとだよりに情報やご感想をお寄せください!
●メールの方／furusato@asally.co.jp
携帯電話からのメールはQRコードを読み取ってください。
●FAXの方／☎0246-26-5157
●おたよりの方／左記編集室まで

いわきあいあいで情報発信中!!
いわきあいあい　検索
Click

ふれあい通信　応急仮設住宅や雇用促進住宅のイベント紹介

内郷雇用促進住宅

●今の笑顔をアルバムに

1月26日、PHOTOHOKUによるマジックショーと写真撮影会が行われました。同団体は、東北各地の被災地を訪問し、震災で写真やアルバムを失った家族の新たな写真を撮影。それをアルバムにおさめてプレゼントするという活動を行っています。

参加した20名のみなさんは外国人によるマジックショーを楽しんだあと、写真撮影会をし、撮った写真をそれぞれが思い思いにアルバムに貼り付けました。同雇用促進住宅の大河内善男自治会長は「一時でもみんなに笑顔になってほしい」と、笑顔あふれる参加者の様子を見守っていました。

子どもたちを撮るカメラマンのブライアン

テープやスタンプを使い、アルバム作りを楽しむ参加者のみなさん

中央台高久第一応急仮設住宅

●子どもたちも豆まき!「浜○(まる)かふぇ」

2月5日、浄土宗福島教区浜通り組青年会の主催で「浜○かふぇ」が開かれました。20名ほどの参加者は、みたらし団子やポップコーンをいただきながら交流を深めていました。

また、後半に行われた「豆まき会」では、学校から帰ってきた子どもたちも集まり、鬼に扮したお坊さんに豆をまき追い払いました。

温かい飲み物を片手に会話が弾む参加者のみなさん

「鬼は外、福は内」とかけ声を出しながら、豆まきを楽しむ子どもたち

表紙の人　中央台東小学校、久之浜第一小学校

写真左から
●遠藤美紗ちゃん(中央台東小6年)　●遠藤悠斗くん(中央台東小3年)
●遠藤未稀ちゃん(中央台東小6年)　●遠藤愛菜ちゃん(久之浜第一小6年)

久之浜出身で現在は中央台高久第一応急仮設住宅に暮らす姉弟とお友達の愛菜ちゃん。ダンスが得意の未稀ちゃんと読書が好きな美紗ちゃんは双子。お姉さんたちは4月から中学生になり、悠斗くんは4年生に。「勉強も頑張りたい」と意気込んでいます。